大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

和井田紀子先生追悼

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南出, 康世 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10502

和井田紀子先生追悼

南　出　康　世

和井田先生が，平成元年になって間もない1月17日に急逝された。昨年は入試運営委員会副委員長，本年は英文学科主任の要職にあって，お元気に其の激務をこなされていただけに，その訃報はあまりにも突然で信じられないものであった。まだ51歳という若さでありこれからという時期だけに突然の死は惜しんでも余りあるものがあるが，ここ最近のご活躍を振り返って，和井田先生のご冥福をお祈りしたい。

和井田先生は1977年9月から翌年8月まで大阪府在外研究員としてロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに出張されR. Quirk 教授(現在は英国学士院院長)のもとで談話文法の研究に励まれたが，それ以来 Quirk 教授は彼女にとって最も敬愛すべき師であり，Quirk 教授にとっては彼女は最大の愛弟子であった。1986年の秋，私もなんどかロンドン大学にある Survey of English Usage (SEU) の研究室を訪れる機会を得た。当時はスェーデン Lund 大学の Stenström 博士，西ドイツ Aachen 工科大学の Bald 博士，SEU 研究員の Chalker 氏などが研究に従事しておられたが，そんなある日，Quirk 教授が入ってこられて話に加われた。Toshiko Waida と同じ大学から来たと話すと，彼女は今どうしているかとお尋ねになったが，その時の非常に懐かしそうなお顔を今でも思い出す事ができる。Quirk 教授のもとで研究に従事した日本人学者は少なくないが，和井田先生が最愛の弟子であったことは，今世紀最大の文法書である *Comprehensive Grammar of the English Language* (CGEL) に T. Waida の名が序文に挙げられ，参考文献のリストに彼女の論文が引用されていることからも伺い知る事ができる。また，CGEL には次の例文が見られるが，おそらく Toshiko というのは和井田先生のことであろう。

Todshiko works far into the night at her thesis. (p. 540) / Most unexpectedly, *Toshiko* had to return to Japan before her studentship had expired. (p. 629)

聞くところによると，和井田先生はこれまでの研究の集大成ともいうべき機能文法に関する論考を出版する準備をしておられすでに Quirk 教授からも序文を戴いていたという。前半は Halliday, van Dijk, S. C. Dik などの機能文法を発展させた理論編，後半は Hearn の作品などを分析した実践編であるらしい。是非とも出版が実現してほしいものである。

和井田先生の最近の研究を語る上で欠くことのできないもう一人の師は筧寿雄教授(神戸大学)である。彼女の海外・国内におけるさまざまな学会発表，翻訳，著述の蔭には常に筧教授の慈愛と示唆にとむ助言があったことは想像に難くない。また，近い将来，*A Comprehensive Dictionary of Japanese Onomatopoeic Expressions* を Mouton de Gruyter 社から出して長年のオノマトペ共同研究の成果を世界に問うという。これを目前にして和井田先生が急逝されたことは筧教授にとって真に残念というしかないであろう。

略　　歴

昭和36年	大阪女子大学英文学科卒業
昭和37年～39年	ハワイ大学，ジョージタウン大学，ワシントン大学で学ぶ。(言語学にて MA 取得)
昭和41年	大谷女子大学専任講師
昭和43年	京都大学大学院修士課程修了
昭和44年	京都大学大学院博士課程退学
昭和44年	大阪女子大学専任講師
昭和49年	大阪女子大学助教授
昭和52年	大阪府在外研究員としてロンドン大学・ユニバーシティ・カレッジに出張
昭和59年	大阪府内地研究員として神戸大学文学部に出張
昭和61年	大阪女子大学教授
平成元年	逝去(1月17日)

研　究　業　績

論　文

1. 「近代英語の他動詞性について——Cognate Object を伴う動詞の一考察」	大谷女子大学紀要 創刊号	昭和42年4月
2. 「George Orwell の作品にみられる *have* と *have got*——*have got* の完了形的意識について」	大谷女子大学紀要 第2号	昭和43年4月
3. 「米語の /i/ と /I/ の音響音声学的考察——その弁別的特徴と余剰的特徴について」	女子大文学・第22号	昭和45年3月
4. 「*Have to* と *must* の意味論的考察——その分布と頻度の変遷について」	女子大文学・第24号	昭和47年3月
5. 「近代英語の関係代名詞の選択規準にみられる“言のゆれ”について(一)」	文学と評論・第3号	昭和49年12月
6. 「近代英語の関係代名詞の選択規準にみられる“言のゆれ”について(二)」	文学と評論・第4号	昭和50年6月
7. 「現代英語の関係代名詞の選択規準について——Iris Murdoch の作品における場合(一)」	文学と評論・第5号	昭和50年12月
8. 「現代英語の関係代名詞の選択規準について——Iris Murdoch の作品における場合(二)」	文学と評論・第6号	昭和51年6月
9. 「現代英語の関係代名詞の選択規準について——Iris Murdoch の作品における場合(三)」	文学と評論・第7号	昭和51年12月
10. 「文頭の主語の焦点化」	女子大文学・第31号	昭和54年3月
11. “On Focusing—Information Focus at the Clause-Initial Subject”	文学と評論・第12号	昭和54年6月
12. 「文末の主語の焦点化——二つの *there* 構文を中心に(一)」	女子大文学・第32号	昭和55年3月
13. “On Focusing—Information Focus at the Clause-Final Subject: In *There*$_1$-Constructions”	女子大文学・第33号	昭和56年3月

14. "On Focusing—Information Focus at the Clause-Final Subject: In Two *There*-Constructions"	女子大文学・第35号	昭和58年3月
15. "English and Japanese Onomatopoeic Strutures"	女子大文学・第36号	昭和59年3月
16. 「日本語と英語のオノマトペの構造」	『尾形敏彦・森本佳樹両教授退官記念論文集』(山口書店)	昭和60年3月
17. 「広告の言語学的研究」井上和子・筧壽雄・柴谷方良氏と共同執筆	『吉田秀雄記念事業財団・助成研究集』	昭和60年6月
18. Information Processing—Thematic Structures in English and Japanese"	女子大文学・第38号	昭和61年3月
19. "Dik's Functional Grammar"	*KLS* 5	昭和63年11月
20. "Functional Appraoch to Discourse Analysis: An Approach to the Contrastive Study of English and Japanese"	『西田龍雄教授還暦記念論文集』(三省堂)	(未)
21. "On Theme and Topic in Japanese"	*The Proceedings of the 2nd International Conference on Functional Grammar*	(未)
22. "Discourse Phenomena Involving Japanese Onomatopes; Devices for the Presentation of Vividness	*The Proceedings of the XIVth International Congress of Linguists*	(未)

著 書

1. *English Connectives* (『談話のなかでみたつなぎ語』) L. C. Schourup 氏と共著	くろしお出版	昭和63年2月
2. *A Comprehensive Dictionary of Japanese Onomatopoeic Expressions* 筧寿雄氏らと共編	Mouton de Gruyter	(未)

3. 『機能文法：理論的背景と分析例』	研究社出版	(未)

翻　訳

『言語のルーツ』(D. Bickerton. *Roots of Language* (1981)) 筧寿雄・西光義弘氏との共訳	大修館書店	昭和60年4月

共同執筆

安井稔(編)『例解現代英文法辞典』	大修館書店	昭和62年5月
安井稔・荒木一雄(編)『現代英文法辞典』(Discourse Analysis と Information Strcuture の項担当)	三省堂	(未)

口頭発表

1. Iris Murdoch の作品における現代英語の関係代名詞の選択基準について	第71回日本言語学会大会（於：京都産業大学)	昭和50年12月
2. Japanese and English Onomatopoeic Structures	The Fourth World Congress of Phoneticians (於：神戸国際会議場)	昭和58年8月
3. Information Processing	日米文化系学術交流センター（於：大阪アメリカ文化センター)	昭和60年7月
4. Thematic Structures in English and Japanese	The 2nd International Conference on Functional Grammar (於：アントワープ)	昭和61年8月
5. English and Japanese Onomatopes in Discourse（シンポジウム）	第4回日本英語学会（於：津田塾大学)	昭和61年9月

6. Discourse Phenomena Involving Japanese Onomatopes	The XIVth International Congress of Linguists (於：東ベルリン)	昭和62年8月
7. Systematic Investigation of Onomatopoetic Expressions (Round-Table Talk)	同 上	
8. Dik's Functional Grammar (シンポジウム)	第12回関西言語学会 (於：神戸市外国語大学)	昭和62年11月
9. 談話分析から見た『耳なし芳一の話』——とくに登場人物の意味的役割について(シンポジウム)	日本文科系学術交流センター (於：神戸大学)	昭和63年11月

その他

書評：M.A.K. Halliday. *An Introduction to Functional Grammar*	『言語研究』91号	昭和62年3月
解説：After all と By the way について	『月刊言語』No. 26, 27	昭和62年3月，4月

(業績表作成に当っては筧教授のお力を得た)